

絶望の淵にも、 かならず 希望の灯はある

取材・文菅井理恵 撮影 穴戸清孝

NPO法人「蜘蛛の糸」理事長

佐藤久男



死に向かおうとする人々の、最後のとりで。となつて話を聞き続け、「秋田の自殺を半減させた男」と呼ばれる人がいる。自身も倒産で死を間近に感じた経験を持つからこそ信じる、「未来に希望を持つこと」の力――。

一五歳から山登りを始めた。日本の山の三分の一は登っただろう。山にはいつも一人で登る。思い通りにならない局面に出会うたび、多くのことを学び、人生の難局を乗り越える糧にした。

山頂に着いて下り始めると、よく二股の道に出合う。上りはかならず山頂に通じているが、下りは迷う。そんなとき、分岐点にどっかとあぐらをかき、一万分の一の地図を広げる。選択を違えば、二〇〇キロも遠回りするかもしれない。一時間、二時間と動かず自然の声を聞き続ける。

すると、体の内側から何かが湧き上がり、「あっ」と思う瞬間が来る。それは決してひらめきではなく、何の確証もない。しかし、一歩踏み出せば、あとは絶対に振り返

らない。とどまっても休んでもいいから諦めずに、自分の決めた道をただひたすら前に進む。

お父さん、 自殺したら 承知しないからね

一九四三(昭和18)年、秋田県北部に生まれた佐藤久男さんは「秋田の自殺を半減させた男」といわれる。身長一六一センチの白髪頭。ずんぐりした体型から発せられる秋田弁が優しく、親しみを感じる。二〇〇二(平成14)年、NPO法人「蜘蛛の糸」を立ち上げ、主に経営者の自殺予防に取り組んできた。誠実でひたむきな人柄だが、堅物ではない。さまざまな事情を抱える相手と真つすぐ向き合う強さ